

都弱視研

東京都弱視教育研究会
練馬区中村北4-17-1
発行人 瀧嶋克己
印刷 依田印刷(株)
第50巻 2号発行 R3.3.31

ピンチをチャンスに変える発想をもって

東京都弱視教育研究会 副会長
東京都立葛飾盲学校 校長

田島忍

東京都弱視教育研究会は、昭和44年の設立以来、半世紀にわたって弱視教育の研究と普及を推進してきました。しかし、令和2年度は、新型ウイルスの感染が拡大する社会情勢の下で、これまで毎年計画的に進めてきた諸事業を通常の形で実施することが困難な状況となりました。

一年のスタートとなる4月の第1回研究全体会と、同じく4月に予定していた研究総会は共に5月に延期をしましたが、緊急事態宣言が解除されない中、集合形式での開催は見合わせざるを得ませんでした。

このような想定外の事態となり、事務局の先生方には大変な御苦労があったことと存じますが、研究総会については、6月に書面表決という形で実施していただきました。また、研究全体会は、資料提供・紙面発表という形でスタートを切っていただきました。さらに、その後はオンラインという形式も導入していただき、会員同士が直接会うことはできなくても、映像や音声によって繋がりを維持しながら研究活動を進めていくことができました。

コロナ禍にあって運営方法の変更を余儀なくされても、決して屈することなく、研究会を通じて共に学び続けていこうとする会員の皆様の熱意や結束力に、深い感銘を受けた一年でした。

イレギュラーな対応は、私が携わっている盲学校の校長会でも必要となり、オンラ

イン等の代替手段を講じることになりました。やはり、直接会うことができないことで、不便さを感じることもありましたが、パソコン、スマートフォン、タブレット端末などが無い時代であれば完全に「中止」となっていた協議会等も、文明の利器の活用により何とか「実施」できたことは、大変有り難いことでした。

「禍を転じて福と為す」ということわざがありますが、コロナ禍で初めて導入したオンライン等の運営方法は、社会情勢が落ち着いた後でも、有効に活用できるのではないかと考えています。例えば、以前は移動に貴重な時間を割き、交通費もかけて集合形式で行ってきた会議の中に、今回オンライン形式で実施して支障の無かったものがあれば、今後も続けて定着を図ることで、仕事の合理化や働き方改革にも繋げができるのではないかと思います。

子供たちの学習等への還元も、ぜひ進めたいものです。私たち教員がオンラインでの通信を経験できたことは、GIGAスクール構想の具現化によって1人1台の端末が配備されるタイミングで、功を奏するはずです。

代替手段としてやむを得ず講じた方策でも、他の関連する課題の解決に繋がっていくことがあります。令和3年度以降も、ピンチをチャンスに変える発想をもち、プラス思考で諸課題に対応していく所存です。

第6回 研究全体会（研究授業）

令和2年10月30日（金）葛飾区立立石中学校（オンラインでの実施）

「弱視児童・生徒の自立活動に関する指導内容・方法の研究」 —「主体的・対話的で深い学び」思考を伴う活動を取り入れた指導について—

講師 広島大学大学院 教育学研究科准教授 氏間和仁先生

1 研究授業

対象児童 第1学年 1名

授業者 湯川 翔平 教諭

題材名 「自分が見分けやすい地図をつくる」

2 授業者自評

- 地図の塗り分けの作業を行いながら、今までに赤とオレンジの違いや色の濃淡の見分けがしにくいということが本人から伝わらなかつたけれど、この授業を通して理解することができました。
- 生徒が色を塗った後の地図を使って、その色を使った理由を説明する展開を取り入れればよかったです。
- この題材を通して、色の問題に限らず、支援が必要だと感じた時に、周りに自分の状況を説明できる力を伸ばすための指導を工夫することが大切であると思いました。

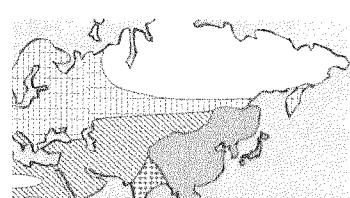
3 質疑応答

質問：似ている色がたくさんあって見分けにくいと言っていましたが、本人の自覚の程度はどのようなものだと理解していますか？

答え：地図を10種類の色で塗り分ける課題でかなり苦戦していました。地図の塗り分けの作業を通して、自分の色の見え方や見分けにくさを理解し、それを相手に伝えるというコミュニケーションの力を育てたいと考え、この題材を選択しました。

質問：最初に提示した地図がモノクロのパターンになっていましたが、なぜですか？

答え：初めから色が付いていると、自分の見分けやすさよりも、元の地図を再現しようと色を選択する可能性が高いと考え、意図的に色がないモノクロな地図を使いました。



4 指導・助言・講話

- 自己理解するのに今回の指導方法が効果的だったかを問う必要があります。自己理解で大切なことは、自分のことを客観的に見ることです。特性を把握して、自分の言葉で伝えられるようにする必要があります。
- 広い面で見る場合と文字などの比較的狭い範囲を見る場合では、「知覚できる実視界の広さが異なってくる」という視点をもって計画の中に入れしていくことが大切です。
- 色覚に特性がある児童生徒でも、コントラストを上げれば塗り分けられた部分の違いを知覚することは可能です。色の視点から作成した教材の見やすさを評価しようと思う時には、白黒コピーをして、教育的に指導者が見せたい文字や図を十分に把握できるかを確認することがポイントとなります。
- 信頼関係の上に展開された授業という点でよかったです。自分の見分けやすい色や合理的な配慮を受けられるよう伝える方法を知って、地図の見方、読み取りにくさを経験させていましたが、必然的な課題設定ができていました。
- 今回は、生徒自身に、次に何を塗るのかを選択させていてよかったです。もう少し授業全体を見通せる工夫があると、さらに主体的になったのではないかと感じました。
- 残り時間を確認できる環境も必要です。環境を整え活動しやすくすることで、さらに達成感を味わえると思います。
- 色の塗り方は、視覚的模倣で学習するが多いと思います。輪郭を決めてから縦横塗りを行う、全体を見渡してからまんべんなく塗るなどのスキルについても取り扱うことが大切です。

(記録 本町田東小学校 近藤 修安)

第8回 研究全体会（研究授業）

令和3年1月14日（木）世田谷区立笹原小学校（オンラインでの実施）

「弱視児童・生徒の自立活動に関する指導内容・方法の研究」 —「主体的・対話的で深い学び」思考を伴う活動を取り入れた指導について—

講師 愛知教育大学 特別支援教育講座講師 相羽大輔先生

1 研究授業

対象児童 第5学年 1名

授業者 川嶋 栄子 主任教諭

題材名 「自分の見え方に合う試験の受け方を見付けよう」

2 授業者自評

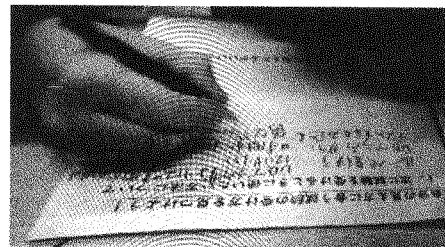
- ・学習の振り返りにおいて、星五つという自己評価をしていました。UDブラウザの試験モードが一つの選択肢になったと考えられます。
- ・UDブラウザを使用するにあたり、誰に何をお願いしてどう使用するか、過程を見通すことが難しい様子でした。使用するまでのハードルの高さを感じたようです。
- ・この後、自分にあった試験の受け方としてルーペの使用を選択しました。合わせて、試験時間の延長を希望しています。

3 質疑応答・協議

- ・社会科だけでなく他教科の試験問題も用意されていたことで、各教科の特徴に目を向けながら悩むことができました。
- ・ICT機器の十分な活用経験が、将来の選択の幅を広げることを実感しました。
- ・実際に使ってみるという経験が、今後のベストな選択につながると感じました。
- ・児童がUDブラウザの準備が大変そう、と気についてのことについては、実際にPDFデータを自分でUDブラウザに取り込む経験をすると良いのではないでしょうか。

4 指導・助言

- ・児童が自分に合う試験の受け方を主体的に考える様子が見られました。小学校段階では、揺れ動きを感じながら自分に合った手段を考えることが大切です。
- ・「試験を受けやすい」とは、速く読んだり解答できたりすることだけではありません。耐久性(つかれにくさ)も非常に大切な要素です。疲労しにくい学習環境を設定できるといいです。
- ・試験問題には見開きでないとわかりにくいページがあるので、UDブラウザで問題を提示する場合はページの構成を工夫するとよいでしょう。
- ・複数の視覚補助具を活用したり、いくつかの配慮を併用したりすることもあります。一つに絞らず、複数の配慮を活用してもよい、と伝えることも大切です。
- ・試験を受けやすくするためには、拡大だけでなく、定規や付箋の活用等も有効です。
- ・弱視当事者の先輩から、どのように試験を受けているか、話を聞く機会があるとよいでしょう。



(記録 足立小学校 神保 有花)

令和3年度 東京都弱視教育研究会総会・記念講演のお知らせ

日時：令和3年4月23日（金）午後2時～

場所：練馬区立中村西小学校

記念講演講師：国立成育医療研究センター 眼科医長 仁科幸子先生